



台 湾

大阪大学工学部

品 川 睦 明

いまさら私が台湾を紹介しようというわけでもないが、たまたま、昭和40年9月16日から昭和41年1月17日までの4か月、台湾の新竹市にある中華民国国立清華大学に原子炉があるところから、その大学院で放射化学の講義をしながら研究実験の指導もしてくれというので、客座教授という名称で呼ばれて行った間のことを書いて土産話にしようというのである。専門をめぐる話は、原子力学会誌の談話室欄に書いたから、ここでは、茶話程度にさせていただいて、勝手な感想をいくつかの話題に分けて述べてみることにする。もとより文責などといったむづかしいことを意識して書くわけでもないのだから、間違いも多いことをお許し願いたい。

<簡単な歴史>

いまの台湾は、さまざまな歴史の末に、住んでいる人の種類も多い。九州より少しせまい土地に東京ほどの人口がある。すなわち1200万人ほどでオランダについて世界の第二位に人口密度がなるらしい。しかし全島どこへ行っても人ごみは少く、のんびりしている。これを思えば東京や大阪などというところが、いかに世界でも特殊な人口密度であるかがわかる。ところで話をもどして、その1200万人のうち、約6割が台湾人で、あとの4割が大陸から終戦後来た人たちである。山人（高砂族）は約20万人であるから数の上では大したことはない。台湾人といわれるのは、日本が統治していた以前から居た中国系の人たちで、その約9割は福建省から、あとは広東省から来た人たちの子孫であるという。そしてその人たちの間ですら互に自分の言葉を使うとわからないので、共通語は日本語か北京語を用いている。山人との間でもそうであり、山人相互でも種族が9種類くらいあって互に共通語を求めあって話すより仕方がない。約35才以上の人たちは一般に日本の小学校教育などをうけているので日本語が上手である。それより若い人となると北京語となる。インテリ間では英語も役立ち、講義なども黄色人種同志が英語でことを足す場合が多い。こんな珍現象が不思議に思われもせず、日常いろいろの言葉が入り乱

れて話されているのがいまの台湾である。

倭寇の頃には、しばしば日本人も出入したらしいが、その頃すでに台湾という名はあったらしい。山のせまった湾というほどの意味から出たのであろう。Formosaと英語で云われるのは、1544年ポルトガルの水夫たちが台湾の島を海からながめて、緑におおわれ如何にも美しかったと見え“Ilha Formosa” (Island Beautiful) と感嘆したこと由来すると云われる。その頃までには、福建や広東から中国系の人々が入りこんで、いま山人といわれる原住民を、山へ山へと追いやって住んでいた。その中国系の人たちの子孫がいま台湾人といわれている人たちである。日本では古来この島を蓬萊の島と云う。何しろ天然物の豊かな美しい山川のあるこの島を悪く云う人はいないようだ。

17世紀に入ってから、北部の台北のあたりから淡水方面にかけてスペイン人が、台南のあたりにはオランダ人が入りこんで、とりでを築いたりなどして頑張っていたらしいが、芝居で有名な国姓爺が1661年に台南附近に敵前上陸してプロビデンシャのとりでや、ゼーランジャの城などを陥れ城下の誓をさせて、白人連を台湾から追放した。そもそも彼は福建人を父とし、九州生れの日本人を母にもつ英雄で、明国に忠誠を尽し国王より鄭成功の名をいただいたという。元台南高等工業学校が、

いまも成功大学(チエンクンターシエとよむ)として立派な大学になっているのもその由来に負っている。その後、周知のように清国が日清戦争の敗戦の代償に見放した1895年より、日本がやがては敗者の側にまわって1945年退去するまで、50年の日本時代を経た。こんな風に再び中国の手に戻ることを彼地では光復とよんでいる。栄光ある復帰というのであろう。そのため蔣政権は、いろいろの意味で光復が好きである。鄭成功がこの国の英雄として一段と今日において名が高いのも、光復大陸につながっている。また主だった各都市に必ずその名のある光復路という町名は、日本より中国に台湾が帰ったのを記念した意味である。ついでながら、この国にはまた、絶対的な2人の英雄がある。それは云うまでもなく、孫文と蔣介石であり、それぞれ中山先生(ツンサン・センサン)中正先生(ツンチェン・センサン)と呼ばれ、台北をはじめ大都市にはもれなく中山路、中正路といわれる大道があり、一等級の主要道路に、これらの栄誉ある名が与えられている。またことごとく額やプラカードになって現われる。台湾は、こんなにいろいろの征服につぐ征服の歴史を経て今日に至っている。それらの替り目ごとに血なまぐさい話が残っている。山地人は、上に述べたほとんどの侵入者と戦って来たことであろう。彼らは彼ら自身を守るためには随分勇敢に戦って来たものらしい。時としては敵の首をはね、棒の先につけて見せしめに道角に突立てたりした。それがため人喰人種とも呼ばれたりした。日本人には霧社事件のような反抗もした。戦後いまの大陸勢の侵入の際には、トラックに中国兵を満載して東部の海岸や横貫道路(日本時代未完成でその後完成された台中花蓮港間の山間道路)の数百米もの高さのある崖から谷へ自からをも犠牲にして何台も何台も突入して最後をとげたともいう。また福建系と広東系の人たの間でもやはり土地の利権をめぐる、おだやかには過ぎてこなかった。各地にある義人廟はこれら両系の争いの犠牲者を祀るものであるという。そして今でも、台湾人の間では、あの市は、あの町はという風に両系のそれぞれの占有地である区別がついている。そして同じ台湾人といっても、両系の通用語は共通でなく、互に道を聞いてもわからないらしい。戦後大陸より来た人たち(外省人とよばれている)と台湾人との間にも一戦を交える場面があったらしい。その結果は台湾人の指導的人物の没落となったようである。その後はますます人々の間に言葉の種類が増えてわからない組合せが多くなってきた。そこで日本語を試みたり、北京語を試みたりして共通語を見出してことを足すといった工合になっている。ときどき汽車の中などで、どちらの日本語も日本人ばなれた会話が行なわれていることがよくある。



龍紋彩縁花青窯隆乾  
清

### <光復大陸>

台湾の街を歩くと、城門などの目につくところに、いろいろな標語が大きな字で書いてある。日本人も漢字を知っているからある程度わかるが、解釈に苦しむものもある。代表的な例は、光復大陸(カンフウ・タールー)だとか勿忘在莒(ウウアン・ツアイチュウ)などである。前者はすぐ想像できるように、「われわれの失った大陸をとり返えそう」というのであろう。後者は總統の名言といわれているもので「莒すなわち東南の小さな島に、故あって今はいるわけだが、大陸が故郷であること、ゆめ忘れるなよ」というほどの意味であろう。

日清戦争の敗戦がもたらした国内の矛盾を、1911年の革命で孫文が一新した感激とその精神は、蔣總統によってまっ直ぐに今に至るまで貫ぬかれている。もっとも孫文ほどの偉大さになれば、衣鉢のつき方にも流派があって、中華民国が共匪として敵視する中共においても、その流れは生きているものようである。

こういったわけで、いまの中華民国は、台湾省と福建省の二省から成立している。もっとも後者は金門島のみであるが。だから国政府は台北にあり、もとの台湾総督府の建物をそのまま用いている。台湾省政府は台中郊外にある。この国の年号は、革命以来のもので1912年を以て元年とする。ちょうど大正元年と一致していることはおもしろい。今年が民国55年である。民国37年頃より政府が台湾へ移ったわけである。台北の南北をつらぬく中山路の北端は、かつての台湾神社への参道にかかる明治

橋であったが、いまはそのものに中山橋という名が与えられていて、橋をかけた年がたしか民国六年ときざまれている。つまり大正六年であったわけである。ついでだがその台湾神社はなくなってそのあとに円山大飯店という台湾一を誇るホテルが建っている。これは総統夫人の経営になる由であるが、それはそれは中国式の粋をこらした宮殿風のものである。

しかし、とにかくこの国は、いま戦時中であることを忘れてはいけない。戦争放棄の憲法の国の日本人は、とかくそれを忘れてしまう。あるいは、戦時中といえば過去のことであって、人ごとのように思ってしまう。だからといって慎しみもなく、物見遊散に出かけるのも考えものである。日本の憲法はたしかによいと思うが、人の心は自己暗示の平和感に酔ってはいないか。台湾にいて日本を見るとき、たしかに日本人のその平和感は、たましいを失った人が必ず迎えるにちがいない危機をはらんでいる。話を元にもどして、台湾が戦時中であることに返るが、これは日日の新聞が大きな活字で、金門島とその対岸あたりの陸海空のコゼリ合いをつたえていることから解る。いまにも大事になりそうな記事が何年もつづいているわけであるが、実は戦争感そのものが、あとで述べたい勝利感と合せて、日本人が直観するそれではなくて、中国人のもつ特長的なものである以上、よほど次元というか波長というか異ったものである。しかし、その軍事のために国が多額の予算を使っていることは間違いない、そして国民生活水準がそのために低下していることもたしかである。その点日本の戦前の生活を思い出さされることもしばしばである。働いても働いても、それほど個人の生活はよくなるのでない。それに労賃も低くて、体当りでの低い労賃を求めている。それもこれも勝つまでは致し方がないといった社会通念である。ただ日本のあの頃と大いにちがうのは、食料だけは豊富なことである。しかも豚肉を中心とする、たらふく食べられる生活。これだけはちがう。さすがに温度にめぐまれた蓬萊の国である。

食料はこのように豊富であっても、それを需める経済は一般に苦しいようである。たとえば大学の教授は日本円にして3万円程度の給料であり、助教授、助手に至ってはさらにさらに少い。すると他の学校へ出かけるのが通例になってくるわけで、週に15時間から20時間教壇に立っている人も多い。これでは研究も出来たものではない。台湾で研究活動が低調なのはこれが大きな原因の一つである。その他の市民も高級官吏をのぞいては苦しいらしい。そのためたとえば、家庭用電気製品など売れゆきがいい。電気洗濯機の如きは、とても買われようとしなくて、手でやるべしである。テレビはめずらしいようだが、家

庭のものではない。駅や商店などの人の集まる場所で多くの人が立見をするといった段階で、日本でも一頃そうであったのと同じである。日本のその頃(1954年頃)米国ではテレビは家庭化していた。そうだからといって台湾では位相がおくれて日本と同じようにやがてテレビが家庭化するとは考えられない。国家的経済が統制的である以上家庭化などはしないだろう。こんなテレビなどのあり方から台湾がおくれているなどという人があるがとんでもない話である。社会に害の多いテレビが発達して何の進歩かと反省せねばならない。自動車のラッシュも同じことである。台湾の乗用車は大てい官庁などの公用のもので米国産の古い型が多く、タクシーはダットサンブルバードの赤く塗ったものが90%以上を占めている。自家用車は極めて少い。とても流行などというところではない。ただしバスはよく発達している。全島の汽車の系統は日本時代からあまり発達していないようであるが、バス道路はずいぶんよくなったようで、複線中の輔装道路がよく発達していて、少し落ちるが米国のグレーハウンドばりの国内旅行系統はよく行きとどいている。

上では戦時体制下のあり方を述べたが、一方社会には日本で経験したアプレゲールの気風も混在している。というのは、台北の中山北路辺りの元日本軍隊のあった地域は、米国軍の駐在するところであり、軍人や外人相手のキャバレーなども多い。ベトナムからは、つるべ式に毎日休暇の兵がやって来て、また出て行く。元の草山(桜の名所)今の陽明山の高級住宅地には米国人の町のようなものができている。市民は米国人相手、そのつぎには色色の用向きで来る日本人相手に観光事業を盛んにしている。ホテルの増設、土産物屋の発達、観光ルートの開設、国内飛行機の宣伝など、なかなかのものである。そうかと思えば、いまだに人力の三輪自転車が台北はじめ各都市で盛んに横行している。大陸から来て退役になった老兵のよい職業だそうである。

### <日本の化石>

台湾で数か月暮していると、過去の日本というか、戦前の日本というか、そんなものによく出喰わす。同宿の東工大の数学のO教授の言を借りると「日本の化石」を見ることができるのである。前節に述べた苦しい国氏経済やそれに伴っておこる生活感情、それに戦後感やいわゆる先進国に対するインフィオリティー・コンプレックスなど、一一わかるような気のする市民感情が受けとれる。それもそれだが、なお化石らしいのは、日本人と見れば人なつこくて、「われわれは日本精神ですよ」などとすぐ云う40~50才くらいの市民の口ぶりからくるものである。半ばお世辞かも知れないが、半ば真剣味があるところは日本の戦時中の教育が身にしみたまま、そし

て戦後の日本の変遷をうけないままで、今に持ち越している人々たちなのである。日本人は気短かでよく怒るが、お人よしで、よく勉強すると思ってくれている人々たちである。またその日本人感を今日もなお改めないわけは、日本が去ってのちに、さらによく見えて来た大陸人の政治と較べてみて、どちらも台湾人には、権力者としてのぞんだのには違いないが、日本人の方がまだよかったという考え方のほかに、戦に負けながらもよくもあれだけ日本は立ち直ったものだという、つまり「見直した」という賞賛の気持が、戦前のはりきっていた（よしあしは別として）日本人のイメージと結びついて現われて来た「日本精神ですよ」という表現だと思える。

もっと卑近な化石は、20年も30年も前の日本の流行歌がとくとくと歌われていたり、レコードなどが鳴ったりするかと思うと、私などが子供の頃の気分そっくりの夜店があって、そこには、一時代も二時代も遅れたような商品が並んでいたり、カンナなどで削って箸にまきつけて売る鮎があって見たり、小人の見世物やヘビ使いなどのかけ小屋があったり、まことに昔にネジをまき返したような感じのすることがよくある。

そのほか、日本が残したものが、いろいろの形で見受けられる。戦前の台湾を知る人なら随分目につくことであろう。たとえば日本料理屋は、よく見付かる。主人の経営者が日本へ引きあげたあと、弟子が継いでいるといった家が多らしく、料理そのものも、家の中のふんいきも大分あちら式に変形しているものが多い。それでも、ニューヨークやシカゴの日本料理ほどの失望感はない。大抵のところでは一番味がくずれていないのは、味噌汁であって、米国の場合どうしてもこのマネができないだろう。ところで、味噌や豆腐は、中国が本家か日本が本家か、その辺のわからない共通の場があるのもやはり東洋は東洋だとも思ったりする。

前にも少しふれたが、鉄道は日本の遺産の大きいものである。鉄道員の大部分は、切符を売る人も、切る人も、荷役をする人も、おそらく操車、運転の人たちも日本時代からの伝統を守っているのであろう。このあり方が日本の鉄道と非常によく似ているし、第一鉄道関係の人たちは日本語がとくによく出来る人がそろっている。バスの切符を買うには台湾語か北京語でないと工合がわるいが、鉄道なら日本語でほとんどことが足る。ただし観光号や特快号などという急行、特急なみの上等の汽車にいるスチアーデイスはそうはいかぬ。英語なら通じる。またそれらの汽車では、窓ぎわに肉厚の硬質ガラスのフタ付コップが置いてある。これはお茶のサービスをするため、まづ小さな赤、青、緑などの紙包みに紅茶、

花茶、緑茶(すべて中国風のお茶の葉)を入れたのを取らせて歩く。これをコップに入れて待っていると、さ湯を入れて廻る。茶の葉が浮く。それを軽く吹いて向うへのけたすきに少しづつすするという工合にする。無論無料サービス。ついでに新聞も無料サービスである。持って廻るのを各人がとる。見たあとで人と交換する。そのあり方はほほえましい。あとで集めて来て、次の汽車の客にまた見せる。も一つ、タオルのサービスも必ずする。おしぼりでなくて、たたんである。

つぎに山地人は日本語がとくにうまい。「私たちは、日本時代は高砂族と云われましたよ」という。場所を違えて前後3部落ほど訪れたが、アイヌの白老村のように観光専用のところ以外でないと民情についてはほんとうのことはわからない。観光向きのところ以外は、政府が保護しているため3週間ほど以前から手続をはじめ警察の許可を得なければ入れない。どこの部落でも人人は、日本人に親しみをもっている。まためづらしそうに多くの人が集ってくる。大人は自由に日本語を使う。弁当にするからお茶をお願いするというと、サアサアというわけで気持よく何くれとサービスしてくれる。レコードまで鳴らしてくれることがある。それが30年ほど前に流行ったやつである。何か眼頭があつくなる思いがした。それでも子供たちは、もう北京語の方がうまい。やはり教育である。高砂族は、個々の文化内容が乏しかったので日本の教育の効果は大きかった。そのように、現在ではカソリックが彼らの心をすっかり教化している。高砂族の村には、必ず立派な教会が一つはある。日曜など小さいな服装の村人がそろって教会に行く風景は、日本では見られない社会風景である。白人の国のムードである。これには考えさせられるふしが多い。あるとき村長に当選したことを誇りにしている人の家に入り込んで10人ばりの一行が食事をさせてもらった。その村長は、きれいな日本語でバイブルの一節を引用して、お説教をいくさりはじめたのには舌をまいた。その人のお母さんは娘のとき入れた入墨のある顔とほほに、もう寄る年波の皺が深かった。いかにも高砂族らしいと思った。この人たちは素朴で、勇敢で、眼差しがベトナム人や熊襲に似ているとも云われる。元をたずねれば日本人と血の通いもあるのかも知れない。そうだったらまたここに先祖の生きた化石があるというわけだ。

話はちがうが、お伽話の化石と思われるものがある。どうも私は、竜宮というのは台湾ではなかったかと思う。というのは、一体に台湾のお宮やお寺の類はすべて屋根がそり上っていて極彩色の竜や鳳凰がおどっている。お堂の柱は驚くべく深いほりの彫刻をほどこしてある。それに乙姫様の服装は中国風であった。しかも台湾は、前

に云ったように天然の産物が多く、さまざまな馳走を、何かとお祭りごとの多い行事のたびに、客を呼んでではタラフク喰べさせる風習がある。そのためには、お金のないときはたとえ借金してでもやるというほどの意気込みである。おそらく招待を辞退する上では、一番困難な国ではなかろうか。浦島太郎もど馳走せめに合ったにちがない。それに台湾の東岸の沖には亀に似た亀島という島まであるから、ますますそれかとも思える次第である。もっとも今ではジェット機で2時間40分の行程だから、行って帰ったからとて白髪になるほど遠くはないが。

### < 博 物 館 >

台湾、とくに台北は、いま中国のミニチュアであるといわれる。大陸の各地から人々がやって来ている。その証拠に料理にしても、北京料理、広東料理、浙江料理、四川料理などその上に台湾料理を合せると、ありとあらゆる中国料理がエンジョイできる。世界一を誇る料理だけに安いものから高いものまで、さまざまな種類に富み、味も巾が広い。それが台北という手頃な面積のうちですべての専門店がすぐ見付かる。料理の名前から実物が連想できるまで、何年かかるだろうか。餃子のつくり方だけでも、初心者の見習いに教えるので5種類はあるだろうという。街角のかけ小屋で練っているメリケン粉の手の入れ方も入念巧緻を極めている。そこで逆にむこうの人が日本に来て一番失望するのは中華ソバのお粗末さだそうである。つい口いやしいお話になってしまったが、こんな意味でも台北自体が中国の博物館であるといってもよいだろう。そこに50年間の日本がおり重なり、米國をはじめ各西洋風が侵入しているのであるから、ますます見学価値がある。

ついでに、商品のあり方で目についたところをいうと、とくに日本製品の進出と香港バリの西洋物である。時計はスイスものと精工舎のもの、洋服生地は英国ものなどというところ。医薬は米國ものか日本もの。日本の有名薬店の進出もすざましい。見なれた広告で字だけがカタカナでなくて漢字にっているものがある。繊維製品も、とくに合成ものは日本ものが多い。家庭電化製品の各社の進出もはげしい。夜のネオンサインの広告もとても派手である。だがこれらの各社の売れ行きは、前にも云った市民経済の理由のほかに、ドッと入り込んだ各社の競争のため思わしくないようである。しかし、鉄道沿線などときどき東海道線あたりに見られるような新築の日本の商社の工場が見受けられる。また聞くところによると、外国製品の輸入は丸で許される場合は少くて、台湾である部分を製造しなければならない。日本物でも一年毎に直輸入の部品は少なくせられて、ついには数年のうちには日本と同名の製品ながらすっかり台湾製となる。

それがため、たとえば日本直輸入のバイクと台湾製のそれとでは、性能も市場価格も大変ちがうらしい。

話から街かどの看板を思い出した。日本人は漢字を知っているから、何から何まで読んでみる。わかると大変うれしい。大ていのものがわかるが、中には郵局や単行路などというように想像できる程度のもが多い。しかしどうしてもわからないものもある。その上に制限漢字でなくて、云わば昔のむずかしい漢字がいくらかでも出てくる。戦前派にはなつかしさもあるだろうが、若い台湾へ行ったら、わからない字が多く、昔私などが漢文を習ったときの頭のいたい思いをしたような気になることであろう。たとえば台湾というのが昔風に書かれてある。いまそれを原稿に書いて見ても活字がないかも知れないので、はばかり次第である。看板が読めない原因には用語自体がちがう場合、西洋語を万葉式に漢字をもって音表式にあらわしてある場合などあるからである。数種の例をあげると、

汽 車……自動車  
火 車……汽 車  
老 師……先 生  
電 視 器……テレビ  
原 子 筆……ボールペン  
柴 油 車……ディーゼルカー  
膠 帶……セロテープ  
羅 斯 福……ルーズベルト

のようであり、まだまだ拾ってみれば面白いものが多い。博物館の話のつもりが変な方へ話を持って行ってしまったが、本論に入ろう。台北市内に国立や省立の博物館がある。これらは、まあまあといったところであるが、郊外の士林にあって昨年11月に、孫文誕生百年を祝って開館した中山博物館は、これは大したものである。正しく中国の美術品を紹介するものとしては世界随一であろう。世界にも稀な古い歴史をもつ中国の誇りを見ようと思えばここだ。ここには、20万点からの古くからの中国の美術品が見事に集められている。その大部分は博物館の背にある山に貯蔵用の穴を設けて入れてある由であるが、館内に展示されているものだけでも大したものである。焼物、金属、宝玉、書画などの数数は、そのいづれもが中国文化を誇らしげに物語っているようである。そもそもこれらの宝物は、北支を日本が攻めた頃米國へ疎開したものであって、民国が台湾に居をかまえてから返却されて、台中に故宮博物館として収蔵されていたものである。おそらくこれだけは、台湾を訪れる人が絶対見逃してはいけない最も素晴らしいものであろう。

### < 戦 勝 感 >

前節までのような話をしていると、ただの4か月の滞

在ではあったが、あれもこれもと尽きるところがない。とくに観光先の風物など、日本内地とは何かとちがっていて、これらもよい話題だろう。東海岸のけわしい崖を走る自動車道路、天祥を横切る横貫道路の大理石の山や谷、回帰線以南の熱帯園のバナナ畑、富士山級の山山に囲まれたところにある湖——日月潭など天然美に恵まれた宝島ではある。しかし与えられた頁も残り少なくなったので、ただ一つ話題をつけ加えて筆をおくことにしよう。

それは、私がなかなか気のつかなかったことなのだが、中国人の日本に対する戦勝感である。それとは対照的に日本人は中国人に対してある種の優越感をもってはいまいか。それは日清戦争の後や支那事変当時のそれとはよほど変わったものであることにはちがいないが、たしかに一種の優越感をもっている。少し考えると、そんな感覚は吹いたら飛ぶようなものであることに気付くだろう。古くは中国から日本はいろいろのものを習って来た。そして一頃は中国カブレをするほど心酔したこともあった。それなのにいま、ましてや敗戦後において優越感をもっているとすれば、それは何をもって自から誇りとしているのであろうか。一口に言えば工業的水準がより高いという他に日本が誇れる点がどこにあるだろう。新幹線が走ったり、自動車が多かったり、そのぐらいのことで、知らぬ間に台湾へでも足を踏み込めば優越感を感じていたのかと思うと自分で自分がなさけなくなる。言わばオモチャをもっている子供が持っていない子供に対して優越感をもっているのと変りはない。

ところが中国人というのは、何といても孔子の子孫である。日本では漢学が流行らなくなった頃、すなわち西洋学が入り出してからは孔孟の精神は人々の心から失せてしまった。拙宅の犬はパンを喰えているときに、菓子を見せたらパンをすてて喰え直すくせがあるが丁度それに似ている。しかし中国では、いかに西洋物が流行する今日でも孔子は教育のシンボルであることには変りない。主義や政党や専門や、そんなものをみんな越えて人々の心には孔子が教養の基準として生きている。吹いて飛ぶようなものではなくて、血に混っているのである。それは同時に煩悩を生み、自然科学的的文化を受け入れ難い非能率性をも止むを得ないものにしている。しかし人間というものを失ってまで、自然科学的オモチャを喜ぶ世界の現在の危機を購わうとはしていないように見える。

少くとも孔子の子孫だからそうあってほしい。中共がもし、先ほども云ったようにパンの代りに原爆を喰え直したとしたら、それは全く失望のほかはない。私はたまたま 蔣総統 宿泊 のホテルの近くで憲兵に訊問された。しかし北京語だからトンと何のことかわからない。やっこのことで私の予約の宿のボーイが来てとりなしてくれた。そのとき憲兵がボーイを通じて「言葉が通じなくて、失礼しました」と言った。私はとても意外なことに驚く外はなかった。日本の憲兵や巡査という通念から割出せないものを受取ったからである。そのときもやはり孔子の子孫だと思った。

また話がそれたが、そんなことがあってのち、私にはまだ一つ疑問が残っていた。台湾の新聞では、しばしば日本に勝ったという意味のことが書いてある。私は日本人として米国に戦争で負けたとは思っているが、中華民国に負けたとは思っていない。筋から言えばそうなのかも知れないが少くとも敗戦感はない。だから、この点だけはいただけない気でいた。ところが、それはただの強がりの戦勝感ではなくて、ほんとうの戦勝感であることが台湾滞在の末期にはじめてハタと気がついたのである。中国人の考える戦は、長期抗戦などと云わなくても、日本人の考える戦よりはよほど波長が長い。日本人は信長式で「負かしてやろう」とする。だから負かしたのでなければ勝った気がしない。中国人はそうではない。いわば家康式で「負けるまで待とう」である。「いま盛んに意気まいていても、時の経つとともに衰えることもあろう」くらいの気持で、相手の弱のを待っている。たとえそれが 100年かかろうか1000年かかろうかよといった波長の長さ。これは日本人には、とても解せない。しかし日本の台湾の占領も、日本が自分で踊って自分で覆えたではないか。それがわづか50年の夢だった。こんな風に気永く構えられては、たまらない。しかしこれとても勝利は勝利。相手の自滅を待つのは立派な勝利だ。しかし性急に負かした勝利ではない。それだから「アナうれし、よろこばし」と踊り上るような勝利感ではない。中国人がいま日本に対して持っているのはもっと平静な勝利感だ。なかなか私がこれを悟るに暇だったのも無理もないと思っている。光復大陸もこのペースらしい。

(教授、原子力工学教室)